

## 河川書の探求(13)

# テムズ川の流れ・水運・歴史・文化

古賀邦雄・古賀河川図書館 (JRRN 会員)

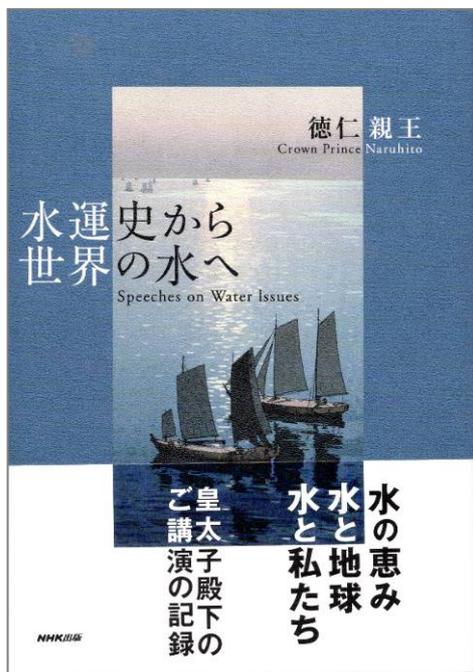
### 1.テムズ川の流れ

テムズ川は、その源をコッツウォルズ丘陵南部、グロスタシャー州サイレンセスター近郊のケンブルとコーツのほぼ中間、テムズヘッドと呼ばれる場所(標高 110m)に発する。多数の川と合流して、ロンドンに至り、サウスエンドで北海に注ぐ。長さ 346km、流域面積 1 万 2,935km<sup>2</sup> であるが、河口部で右岸から合流するメドウェイ川を支川とみなすと流域面積は 1 万 6,343km<sup>2</sup> となる。

メイデンヘッドからウインザー間には、洪水時の流下能力を目的とした長さ約 12km の 2 次水路・ジュビリー川が 2002 年に開削され、また、キングストンからリッチモンドの間、河口から約 89km 地点にはティントン水門が設置されている。これより下流は感潮域になっている。ウーリッジ上流には、テムズバリアと呼ばれる防潮堰が 1984 年に設置されている。

### 2.テムズ川の水運

徳仁親王著『テムズとともにー英国の二年間』(学習院総務部広報課・1993 年)では、テムズ川水運の変遷を論じる。製粉業者の水車の利用から、石炭の運送、上流から、ビールやウイスキーの原料であるモルトがロンドンに運ばれ、植民地からは砂糖、煙草、米、茶などが輸送された。しかし 19 世紀、石炭などが鉄道運送、トラック貨物輸送に移り水運が次第に衰退していく過程を捉える。



同著『水運史から世界の水へ』(NHk 出版・2019 年)では、第 5 章 17~18 世紀におけるテムズ川の水上交通について、河川改修を含めて述べられている。17 世紀以前のテムズ川は交通路として利用すると言うより河川は漁民が設置した築や製粉業者が水車用の動力源としての堰が設置され輸送業者と紛争が生じていた。13 世紀には輸送業者と製粉業者の妥協策として、フラッシュ・ロックが造られる。これは製粉業者が設けた堰に船が通れる開閉式の水門が設置された。

それから、航行の妨げになる浅瀬には河川改修が施行された。さらに、バウンド・ロックと呼ばれる閘門が設置された。1751 年以降、新たなバウンド・ロックの建設、川沿いに船を曳くために付けられた馬用の小道(トーイング・パス)、浅瀬の浚渫、オックスフォード運河の開削など、水路網の整備がなされたとある。

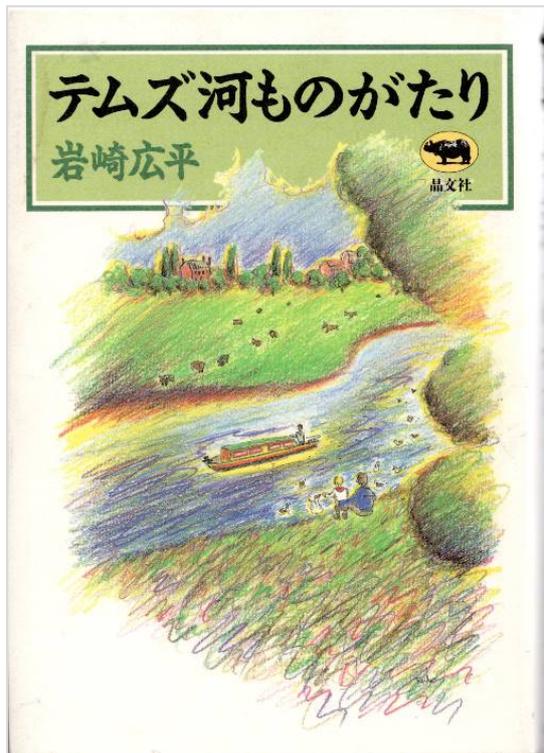
### 3.テムズ川ものがたり

小川和彦著『テムズ川橋ものがたり』(武蔵野書房・2006 年)は、ビッグ・ベンと大観覧車のウェストミンスター橋、シネマ「哀愁」の橋・霧の街のウォーター橋、文豪夏目漱石の散策の道のロンドン橋から塔橋を巡り、その魅力を述べている。三谷康之著『事典・イギリスの橋ー英文学の背景としての橋と文化』(日外アソシエーツ・2004 年)には、中世は政治・社会情勢の不安定から旅も危険性が伴い、旅の安全面の便宜を図るために、修道士の団体による橋や道路の普請が行なわれ、橋の上に礼拝堂が建てられた。

岩崎広平著『テムズ河ものがたり』(晶文社・1994 年)は、テムズ川の流れを上流から河口まで綴った歴史紀行の書である。

ガヴィン・ウエイマン著『テムズ河物語』(東洋書林・1996 年)の書の中で、洪水の記録がある。昔からテムズ川は氾濫して堤防を越え、建物を破壊し、住人と家畜を溺れさせた。この災害は古くはローマ時代まで遡ると言う。1953 年には、東海岸に悲劇的な洪水が起こり、16 万エーカーの農地と 200 の工場、200 マイルの線路、水死者は 300 名を超えた。

その後も 1968 年、1974 年、2003 年と起こり 2007 年の洪水では英国南部で約 35 万人断水被害を受け、5 万世帯が停電した。最近では 2014 年 2 月ロンドン市に被害が生じ、一部の地域では 1 ヶ月以上も洪水の影響を受けた。



#### 4.テムズ川の歴史と文化

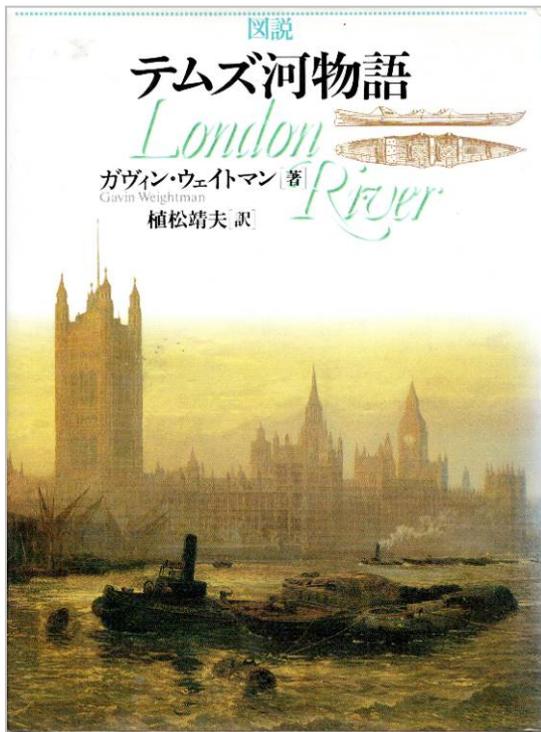
相原幸一著『テムズ河－その歴史と文化』(研究社出版・1989年)には、テムズヘッドの上流からロンドン・河口まで巡り、テムズ・セヴァン運河、マグナカルタ調印の地ラニーミード、日本の唐門と高浜虚子の句碑<雀等も人を恐れぬ国の春>など、事細かに纏められている。

その内容は上流篇で、テムズ・ヘッドからレチレイドまで、ケルムスコットからオックスフォードまで、サンフォードからレディングまで、ソニングからメイドンヘッドまで、ウインザースティンズまで、レイラムからキングストン・アポン・テムズまで。

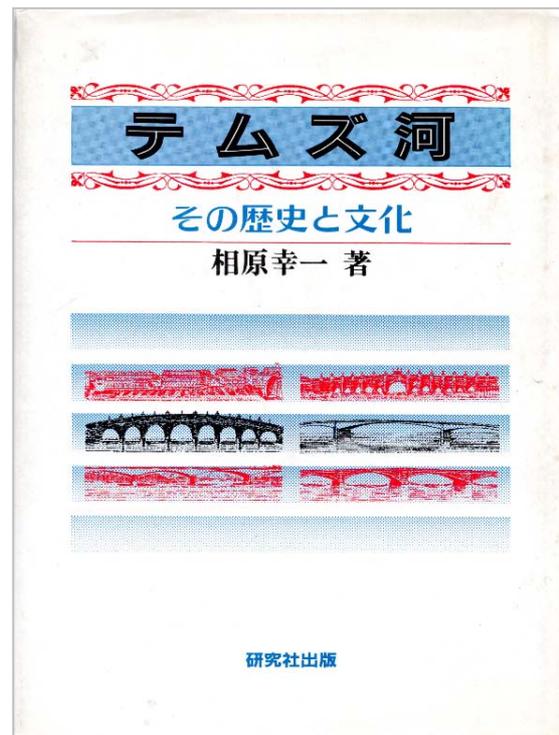
ロンドン・河口編では、テディントンからリッチモンドまで、キュー植物園からバタシーまで、チェルシーからランベスまで、ウエストminster橋からロンドン塔まで、タワー橋から河口までのその歴史と文化を論じる。

最後に、岡本誠著『テムズ川ウォーキング』(春風社・2004年)は、オックスフォードからウインザーまでの120kmを踏破した記録である。

以上、テムズ川の書をいくつか挙げてきたが、今日のイギリスの文化、政治、経済の発展はテムズ川なくしては、成立しえなかったと言える。



小説としてリチャード・ドイル著『ロンドン大洪水』(サンリオ・1982年)がある。



■ 連載『河川書の探求』のバックナンバーはJRRNホームページ内の以下のページよりご覧いただけます！

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/category/library>